第五章　グローバルな戦争とローカルな反乱

――第一次世界大戦期ドイツの対ロシア後方攪乱・扇動工作と「満蒙独立運動」――

田嶋信雄

はじめに

第一次世界大戦は、人類が経験した初めてのグローバルな戦争であった。戦争は、たんにヨーロッパ的な規模において戦われただけではなく、中東・アジア・アフリカ・オセアニアなどに存在していた列強の植民地においても、また、太平洋・大西洋・インド洋などの広大な海洋においても戦われたのである。

しかしながら、第一次世界大戦のグローバルな性格を考える場合、たんに日本やアメリカ合衆国といった非ヨーロッパ大国の参戦や、欧州列強と非欧州列強の国家間関係の態様、あるいは植民地における列強間の戦争の存在を指摘するだけではもちろん十分ではない。この初めてのグローバルな戦争が、ローカルなレヴェルでの民族運動に与えた政治的な影響も無視するわけにはいかない。

しかも、さらに一歩進めて考えてみる必要があるのは、たとえばイギリス帝国の外交戦略とアラブの民族運動の関係に典型的に示されるように、ローカルなレヴェルでの民族運動が、逆に列強のグローバルな戦略にも顕著な影響を与えていたという事実である。グローバルな「帝国」の力は、ローカルな民族運動を解き放ち、そうした諸民族の運動は、その後の「帝国」のグローバルな外交および戦略を逆に拘束することになるのである。このようなグローバルな現象とローカルな現象の相互規定的な関係を「グローカルな」関係と定義するならば、第一次世界大戦は、まさしく、人類が初めて経験した「グローカルな戦争」であったといえよう。

本稿では、ドイツ帝国と「満蒙独立運動」の関係を具体例として取り上げ、グローバルな戦争＝第一次世界大戦がローカルな民族運動と接触したときに織りなされる複雑な政治力学を、「グローカル・ヒストリー」の観点から略述することにしたい。

一　第一次世界大戦の勃発と東アジア

一九一四年八月、日本は日英同盟に藉口してドイツに宣戦を布告し、同年一一月にはドイツの東アジアにおける最大拠点＝青島を攻略した。その後日本は、海軍第一特務艦隊をシンガポール方面へ、第三特務艦隊をオーストラリア・ニュージーランド方面へ送った。さらに一九一七年三月には第二特務艦隊を地中海へ派遣し、ドイツ海軍・オーストリア海軍との交戦状態に入ることになるが、基本的には青島におけるドイツ軍・オーストリア軍の降伏で東アジアでの対独・対墺戦争は終結した。

一方中国は、約二年半後の一九一七年三月に北京政府がまず対ドイツ国交断絶を宣言し、九月に宣戦布告をおこない、同じく九月には孫文率いる広東政府が対ドイツ宣戦布告をおこなったが、それまで中国は世界大戦には中立の立場を維持した。したがって、中国駐在のドイツ公使館は一九一七年三月まで存続し（上海総領事館はその後もしばらく存続）、その間ドイツは、中国においてさまざまな政治工作をおこなった。

第一は、北京での日本との秘密の和平工作である。駐華公使ヒンツェ（Paul von Hintze）は一九一五年五月、日本公使日置益との秘密の接触を試み始め、一五年末から一六年五月まで、断続的に交渉を持った。ヒンツェは日本との妥協の達成のためにはいつでも中国との友好関係を犠牲にする用意があったが、しかしこれは結局失敗に終わる[1]。

第二に、中国駐在ドイツ公使館は、対独戦争に参加しないよう中国政府や中国各界への働きかけをおこなった。それはたとえば、一九一七年二月における駐華公使ヒンツェによる段棋瑞への賄賂を含めた政治工作であったり、「軍閥」（督軍）への働きかけであったり、康有為、孫文、唐紹儀ら政治家への働きかけであった[2]。

第三は、中立国中国という政治空間を利用した協商国への政治的・軍事的謀略計画である。以下では、この第

三の側面を素描することとしたい。

二　「鞏衛団」事件

一九一四年一二月末、ロシア帝国政府は、東アジアにおけるドイツの動向に関し、驚くべき情報を入手した。その情報によれば、ドイツが「満洲・蒙古における支那の馬賊」を教唆し、「シベリア辺境を騒擾」せしめ、その機に乗じて「独逸の俘虜を解放し、鉄道を破壊せんと企て」ているというのであった。想定されたのはシベリア鉄道ないし東清鉄道であった。

この情報を重視したロシア帝国政府・外務省は、北京駐在ロシア公使クルペンスキー（Vasilii N. Krupennskii）を通じて北京駐在日本公使日置益と交渉し、南満洲（ロシアの権益外）におけるドイツの対ロシア破壊工作に関する捜査を日本の官憲に依頼した。この例に示されるように、日本帝国外務省とロシア帝国外務省は、第一次世界大戦に直面し、とりわけ「満蒙」に関する情報の交換において、密接な連携をおこなっていた。[3]

翌一九一五年二月五日、奉天総領事落合健太郎は以下のような情報を外相加藤高明に伝えた。すなわち落合によれば、上述のドイツの対ロシア破壊工作には奉天（現瀋陽）駐在ドイツ副領事ヴィッテ（Witte）が関与しており、(1)ヴィッテは『徳華電報』なる新聞の印刷配布ないし中国紙の買収などのプロパガンダ方面で活動するとともに、(2)奉天在住のユダヤ系ドイツ人がドイツのために馬賊の使嗾を計画している、というのであった。東清鉄道ないしシベリア鉄道爆破計画という「独探馬賊」の風評に、あらたにドイツによるプロパガンダ計画という「風評」が加わったのである。以上のような情報のため、南満洲に居住するドイツ人は、日本官憲の厳重な監視下に置かれることとなった。[4]

一九一五年四月二日、北京駐在ロシア公使館がまたしても日本側に重要な情報提供をおこなった。それは、在

奉天ドイツ領事館が「鞏衛団」なるテロ組織を創設し、南北満洲および極東ロシアにおいて日本およびロシアの鉄道・橋梁の破壊などさまざまな軍事上の妨害を加え、あるいはロシア高級官僚の殺害を企てており、実行者に対してさまざまな報償を与えようとする計画があるというのであった[5]。

四月二六日、奉天駐在ロシア武官ブロンスキー（Vasilii Vasilievich Blonskii）は、奉天駐在日本領事館および北京駐在日本公使館を通じて日本外務省に、「鞏衛団」の実態に関する報告を提出した。それによれば、鞏衛団の設立は、中国に残留するドイツ人が日露両国の鉄道を破壊し、もしくは軍事上の障害を加えるため「所謂独人特得の破壊主義を発揮」したものであり、当初は華北のドイツ人等によって唱道されたものであったが、破壊工作実行上の目的地が南北満洲および内蒙古地方にある関係で、奉天を根拠地とすることになった。鞏衛団の設立は「在支那独逸官憲より本国政府へ意見具申を為したる結果」なので、経費もドイツ国庫より軍事費の一部として取り扱われているようだ。鞏衛団を組織したドイツ人は、中国の対日・対露関係が危殆に瀕するかのように誇大に吹聴して、中国人を「巧妙に」組織しているという。また、鞏衛団の中国人団員は、従来からドイツ人に使用されているものか、中国人使用人の知人の中から選抜され、比較的多額の給料を支給されているというのである。

しかしながら、その後日本外務省が聴取したブロンスキーの「直話」によれば、これら団員の士気およびドイツ人の対応は、以下のような状態であった[6]。

> 之等の支那人は団長の命を奉じ必ず日露両国に対する破壊的行為を断行する決心あるにあらずして、要は優給を得て一時の発財を目的とするもの多く、其の危険なる企画に着手せざるのみならず、旅費の存する間は各地を徘徊し、旅費欠乏を告ぐると同時に帰来して随意の報告をなすに過ぎず、茲に於てか、独人は頻りに焦慮して支那人を督促厳命するも既に数月を経過して一も効果を見る能はず。

すなわち鞏衛団はたしかに実在し、ドイツ領事館のヴィッテがその指導をおこなっていたが、その実態は以上のように極めて貧弱なものであった。満洲および内蒙古を舞台とした北京駐在ドイツ公使ヒンツェおよび奉天駐在ドイツ領事ヴィッテの策謀は、大量の資金を無駄にしたまま、行き詰まってしまった。しかしながら、ロシアおよび日本の外交当局および官憲は、あたかも水鳥の羽音に驚くように、数ヶ月もの間、戦々恐々たる状況に陥っていたのである。

三　パッペンハイム事件

以上のように日本側およびロシア側が「鞏衛団」の影におびえ、その実態を必死になって捜査していたちょうど同じ頃、一九一五年三月一二日、駐日ロシア公使マレフスキー＝マレヴィッチ（Nikolai A. Malevskii-Malevich）が外務大臣加藤高明を訪問し、ロシア本国外務省からの驚くべき情報を伝達した[7]。

独逸側に於ては予て何等かの方法により東清鉄道を破壊し東露交通断絶を目論見居る形跡ありたるに付〔ロシア側は〕常に注意を払い居りたる所、今朝海拉爾〔ハイラル〕領事より同地付近に八名の独逸国人の組織せる駱駝隊現れ、其荷物の一より爆薬および Pappenheim の名刺（同人は北京独逸公使館附武官にして最近数週間所在不明なり）出でたる点より見れば同人は之を指揮し居るものと認めらる、尚一行の目的は独り東清鉄道のみならず南満鉄道線の破壊をも企図し居るものなる趣…。

すなわちこの報告によれば、北京駐在ドイツ公使館付陸軍武官パッペンハイム（Werner Rabe von Pappenheim）が東清鉄道および南満洲鉄道の破壊のため、ドイツ人八名からなるテロ部隊を組織および指揮し、

駱駝に乗った部隊がハイラルに現れたというのである。

こうした情報は、すでに見たように、何度か日本外務省に伝えられていたものの、多くは非常に疑わしいものであった。そのため外相加藤高明は、「例の露国側の情報なれば遽に信を措き難き」との感を懐いた[8]。しかしながら、東清鉄道爆破を目指して北満洲にあったパッペンハイムおよびその他のドイツ人を含む一行は、すでにそのころ、ハイラル付近において、自ら買収した蒙古義賊バボージャブ（巴布札布、パブチャップとも）の率いる蒙古人集団に殺害されていた[9]。

北京駐在ドイツ公使館付陸軍武官パッペンハイムが駱駝隊を率いて北京を密かに脱出して北満洲に向かったのは、日本外務省がマレフスキー＝マレヴィッチからその「風評」を得た一九一五年三月から約半年も前の一九一四年九月のことであった。すなわちパッペンハイムは、第一次世界大戦勃発から一ヶ月が経過した時点ですでにシベリア鉄道のさまざまな重要地点の破壊工作計画を実行に移し始めたのである。

パッペンハイムは、当初は「中国官憲」（おそらく東北地方の諸「軍閥」や「馬賊」）を使嗾してシベリア鉄道を爆破させようとしたが、中国側は「日本とロシアへの恐怖」からこれを拒否したという。さらに、パッペンハイムの報告によれば、中国側が協力を拒否したため、みずから満洲に赴き、「数度の爆破工作を試みた」が、「強力な鉄道監視のため今まで成果はなきに等しく、あっても不十分」であり、このためかれは、同年一〇月、ひとたび満洲から北京に戻った。

さらにパッペンハイムは、当時、日本がシベリア鉄道を通じてヨーロッパに兵を送っているという噂にナーバスになっていた。そこでかれは日本にスパイを送って日本の動員状態を探らせることとなった。その諜報活動に基づきパッペンハイムは、同年一〇月、「現在までシベリアや海路を通じたヨーロッパへの輸送がないことは確実」との報告をベルリンに送付していた[10]。

パッペンハイムはさらに、そうした情報を現地で確認し、場合によってはロシアの輸送を妨害するため、みず

から「もう一度」満洲に赴くことにした。[11] 満洲での鉄道爆破は、「いままでロシアの鉄道警護が強力なため成功していない」ので、パッペンハイムは自ら満洲で「さらに試みを継続」することになったのである。[12] 鉄道爆破のための工作費はすでに五，〇〇〇ドル消費されたが、不足したので、パッペンハイムはさらに大きな財政支援をドイツ陸軍に要請した。[13]

北京駐在ドイツ公使館のマルツァーン（Adolf Georg Otto von Maltzan）によれば、パッペンハイム武官は一九一四年一二月半ばに陸軍総司令部から直接に鉄道爆破の軍事命令を受けたという。しかもそれはドイツ帝国宰相ベートマン＝ホルヴェーク（Theobald von Bethmann-Hollweg）の意を体したものであった。しかしそれは当時の中立国中国でのことであり、この軍令は国際法に違反しているため、ドイツ外務省当局は作戦の詳細を知らされていなかったという。[14]

翌一九一五年初頭、パッペンハイムは北京やその周辺に居住していた徴兵可能なドイツ人一行とともに内モンゴルへの遠征をはかった。同年三月半ば、北京駐在ドイツ公使館に、パッペンハイム一行がドロノール湖付近で馬賊に襲撃され、最後の一人まで虐殺されたという情報が入った。殺害したのは、パッペンハイムがテロ活動への支援を求めて接近した内モンゴルの独立運動家バボージャブであった。モンゴル人商人が北京にもたらした情報によれば、パッペンハイム一行が渓谷を通過する時に襲われ、最後まで抵抗したが倒れた、という。殺害はロシア帝国政府がバボージャブに教唆したものであり、遺体は爆発物を仕掛けて焼却されたといわれている。[15]

四　バボージャブと「内蒙独立運動」

第一次世界大戦勃発から遡ること三年の一九一一年一〇月、辛亥革命により清朝の支配が弱体化すると、清朝の版図におかれていた外モンゴルでは、ロシア帝国の政治的支援を得て、ハルハ地方の諸王侯が独立運動を起こ

し、同年一二月にはボグド・ハーン政権が成立した。

また、内モンゴルにおいても、バボージャブを始めとする諸王侯がボグド・ハーン政権に合流して清朝支配から脱する動きが見られた。バボージャブは一九一二年八月、内モンゴル・ソルク旗から四〇数名の騎兵を率いてフレー（ウルガとも。現ウランバートル）に向かい、新生国家へとはせ参じたのである。バボージャブは、ボグド・ハーン政権から「東南辺境モンゴル人鎮撫官兵総管大臣」なる地位を与えられ、一九一三年一月、遠征軍を指揮して内モンゴルに進軍した。[16]

モンゴル軍の遠征は当初順調に進み、各地で中国軍を圧倒したが、しかしその後ロシア帝国が中華民国との関係悪化を恐れ、一九一三年一一月、ボグド・ハーン政権に内モンゴルからの撤退を要請したため、内外モンゴル統一の流れは阻止された。内モンゴルの中国からの独立を目指したバボージャブの夢もここにいったん頓挫した。しかしかれは外モンゴルへの帰還を潔しとせず、ハルハ河の沿岸に部隊を維持しつつ駐屯を続けたのである。[17]

一九一五年初頭の厳冬期、そこに忽然と現れてバボージャブにロシアおよび日本に対する鉄道爆破計画を持ちかけたのがパッペンハイム駱駝隊であった。グローバルなドイツ帝国の戦略と、ローカルな内モンゴルの反乱が政治的に接触したのである。バボージャブは、いったんその提案を受け入れたかに見えたが、逆に不意を突いてパッペンハイムらを殺害した。こうしたバボージャブの行動には、ドイツの中国での破壊活動を恐れるロシア帝国の政治的意図と、「モンゴル独立運動」の中での生き残りをかけたバボージャブの政治的な計算があったといわれている。[18]

数ヶ月後の一九一五年六月七日、外モンゴルに関する中露蒙協定（キャフタ協定）が調印され、中国の宗主権のもとで外モンゴルの自治のみが承認されることとなった。ボグド・ハーン政権にも見捨てられた形となったバボージャブは、川島浪速らの「満蒙独立運動」の工作の対象となった。パッペンハイム殺害後の一九一五年一一月、内モンゴルのハルハ河岸でバボージャブと面会した日本人青柳勝敏と木澤暢は、その様子を以下のように記

している。[19]

そこは興安嶺北、ソロン山西側の地域で、落葉松の密林地帯に連なり、高さ一丈五尺に達する楊木が密生して極寒の節も燃料が豊富に得られ、かつ積雪の中でも馬が脚で雪を掻き分ければ枯草を喰うことが容易であり、必要なる飲料水もまた豊富で、蒙古地帯としては真に理想的な兵馬の根拠地であった。主将巴布札布は躯幹長大にして肥満した容貌魁偉の壮漢で、態度も悠揚として迫らず、如何にも胆力の優れた英将たる貫禄を備え…

その後バボージャブは活動を続けるが、この間、一九一六年六月六日の袁世凱死去により日本側はかれの軍事行動を抑制するようになった。日本という政治的後ろ盾を欠いたバボージャブは、その後、無謀とも思える軍事行動を継続し、一九一六年一〇月一七日、ジョーウダ盟林西を陥そうとする作戦の中で戦死したのである。

おわりに

「鞏衛団事件」や「パッペンハイム事件」は、もちろんヴィッテやパッペンハイムの独断ではなく、ドイツ本国からの指令に基づいていた。しかもパッペンハイムの場合、それはたんに陸軍省や外務省からの指令ではなく、帝国首相ベートマン＝ホルヴェークその人の意を体したものであった。

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世はすでに第一次世界大戦前から「世界政策」のなかでイギリス帝国、フランス帝国およびロシア帝国におけるイスラーム系・非ロシア系諸民族の反乱を扇動することに大きな関心を抱いていた。[20]

第一次世界大戦勃発後にドイツがおこなった対ロシア後方攪乱・革命煽動工作のなかで、もっとも成功し、また歴史上もっとも有名になった作戦は、いうまでもなく、レーニンの帰国への援助と、それにともなうロシア革

命・ボリシェヴィキ革命の促進であったが、それは一九一四年八月の戦争勃発から三年後のことである。しかしながら、ドイツは、世界大戦勃発直後から東欧で、中東で、インドで、アフガニスタンで、東南アジアで、さらに東アジアで、さまざまな破壊工作・革命工作を展開した。「鞏衛団」や「パッペンハイム事件」は、第一次世界大戦におけるドイツのグローバルな戦略の一環を形成していたのである。

パッペンハイムが接触したバボージャブは、内外モンゴルの統一と独立を求め、中国軍と戦い続けた。それはボグド・ハーン政権の成立を契機としたローカルな反乱として発生したが、ロシア、中国、日本という大国間の政治の中で翻弄された。ドイツ帝国のグローバルな戦略は、このローカルな反乱を政治的に利用しようとしたが、それは無様な失敗に終わった。ドイツ帝国の「満洲」における戦略は、このローカルな反乱の論理を理解して接近したのではなく、ただ利用しようとしただけであった。その余りの政治的利用主義のゆえに、ドイツは、このローカルな反乱を取り込むことに失敗したのであった。

註

（1）詳しくは、以下の研究を参照のこと。Akira Hayashima, *Die Illusion des Sonderfriedens. Deutsche Verständigungspolitik mit Japan*, München: Oldenbourg, 1982.

（2）詳しくは、以下の研究を参照のこと。田嶋信雄「孫文の「中独ソ三国連合」構想と日本　一九一七―一九二四年」服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、二〇〇七年、三―五二頁。

（3）日置公使発加藤大臣宛、一九一四年一二月二五日、外務省外交史料館「欧洲戦争ノ際独国人ノ東清鉄道破壊計画一件（鞏衛団組織）」B-5-2-2-0-54（アジア歴史資料センター レファレンスコードB07090649100）（以下「鞏衛団組織」と略）。

（4）落合総領事発加藤大臣宛、一九一五年二月五日、「鞏衛団組織」。

（5）町田武官発長谷川参謀総長宛、一九一五年四月二日、「鞏衛団組織」。

（6）「独人陰謀の鞏衛団近状」、一九一五年四月二六日、「鞏衛団組織」。
（7）加藤大臣発日置公使および落合総領事宛、一九一五年三月一三日、「鞏衛団組織」。
（8）同右。
（9）中見立夫『「満蒙問題」の歴史的構図』東京大学出版会、二〇一三年、一六九―一九八頁。
（10）Zimmermann an Jagow, 16. Oktober 1914, in: Politisches Archiv des Auswärtigen Amts (Berlin), R22396, Gr. Hauptquartier Nr. 14, Haltung Japans. Frage Kiautschou.
（11）Zimmermann an Jagow, 24. Oktober 1914, ebenda.
（12）Zimmermann an Jagow, 1. November 1914, ebenda.
（13）Zimmermann an Jagow, 9. November 1914, ebenda.
（14）von Maltzan an Hammersen, 11. Dezember 1920, in: Politisches Archiv des Auswärtigen Amts, R23199, Weltkrieg China. Expedition Rabe von Pappenheim.
（15）Ebenda.
（16）バボージャブは、日露戦争の時に日本軍に使嗾され、日本側をして「或いは敵の後方連絡を脅かし、或いは鉄橋爆破を敢行するなど著しき功績を顕した」と言わしめたほどの活動をおこなっていた。楊海英『日本陸軍とモンゴル』中公新書二〇一五年、二〇頁。
（17）楊海英、前掲書、二〇頁。
（18）中見立夫『「満蒙問題」の歴史的構図』東京大学出版会、二〇一三年、一六九―一九八頁。
（19）楊海英、前掲書、二〇頁。
（20）フィッシャー『世界強国への道』I、岩波書店、一九七二年、第四章「革命の促進」、一五一―一八五頁。

参考文献

欧文文献

Burmeister, Helmut, „Der geheimnisvolle Tod des Werner Rabe von Pappenheim. Der Liebenauer Baron und sein Schicksal in China", in: Burmeister, H./Jäger, V., (Hrsg.), *In China 1900. Der Boxeraufstand, der Maler Theodor Rocholl und das „alte China"*, Hofgeismar: Verein für hessische Geschichte und Landeskunde e. V 1834, Zweigverein Hofgeismar, 2000, S. 109–126.

Fischer, Fritz , *Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914/18*, 3. verbesserte Aufl., Düsseldorf: Droste, 1964. 邦訳、フィッシャー（村瀬興雄監訳）『世界強国への道』Ⅰ・Ⅱ、岩波書店、一九七二年・一九八三年。

Happel, Jörn, „Eine Karte voller Ziele. Deutsche Sabotageträume in Russland während des Ersten Krieges, in: *Osteuropa kartiert*, Wien: Lit verlag 2000, S. 61–83.

Hayashima, Akira, *Die Illusion des Sonderfriedens. Deutsche Verständigungspolitik mit Japan*, München: Oldenbourg 1982.

Kreutzer, Stefan M., *Dschihad für den deutschen Kaiser. Max von Oppenheim und die Neuordnung des Orients (1914-1918)*, Graz: Areas Verlag 2012.

Kuromiya, Hiroaki / Mamoulia, Georges, „Anti-Russian and Anti-Soviet Subversions: The Caucasian-Japanese Nexus, 1904–1945, in: *Europe-Asia Studies*, Vol. 61, No. 8, 2009, pp. 1415–1440.

Seidt, Hans-Ulrich, *Berlin, Kabul, Moskau. Oskar von Niedermayer und Deutschlands Geopolitik*, München: Herbig Verlagsbuchhandlung 2002.

Underdown, Michael, "Aspects of Mongolian History, 1901–1915", in: *Zentralasiatische Studien*, Bd. 15, 1981, S. 152–240.

和文文献

栗原健「第一次・第二次満蒙独立運動」『国際政治』第六号（一九五八年）、五二―六五頁。

斎藤聖二『日独青島戦争』ゆまに書房、二〇〇一年。

杉原達『オリエントへの道――ドイツ帝国主義の社会史』藤原書店、一九九〇年。
田嶋信雄「リュシコフ・リスナー・ゾルゲ――「満洲国」をめぐる日独ソ関係の一側面」江夏由樹他（編）『近代中国東北地域史研究の新視角』山川出版社、二〇〇五年、一八五―二一一頁。
――――「孫文の「中独ソ三国連合」構想と日本　一九一七―一九二四年」服部龍二編『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、二〇〇七年、三―五三頁。
橘誠『ボグド・ハーン政権の研究』風間書房、二〇一一年。
中見立夫『「満蒙問題」の歴史的構図』東京大学出版会、二〇一三年。
山内昌之『納得しなかった男――エンヴェル・パシャ　中東から中央アジアへ』岩波書店、一九九九年。
楊海英『日本陸軍とモンゴル――興安軍官学校の知られざる戦い』中公新書、二〇一五年。

中文文献

盧明輝『巴布扎布史料選編』呼和浩特、中国蒙古史学会、一九七九年。
盧明輝「巴布扎布伝記」『中国蒙古史学会成立紀年集刊』呼和浩特、中国蒙古史学会、一九七九年、五七六―五七九頁。
田志和・高楽才『関東馬賊』吉林、吉林文史出版、一九九二年。
王王成（整理）「巴布扎布」『林西文史選』林西、中国人民政治協商会議林西文史史料研究委員会、一九八六年、一〇七―一一六頁。